第18回「障害児を普通学校へ・全国連絡会全国交流集会inくまもと」
～ママどうしていっしょの学校に行けないの～

現地実行委員会　事務局長　桑本謙

１，はじめに

去る２０１７年8月26,　27 日の両日、熊本学園大学を会場として、「第18回障害児を普通学校へ・全国連絡会　全国交流集会inくまもと」～ママどうしていっしょの学校に行けないの？～を開催しましたところ、目標を大きく上回る400人に迫るご参加を得て、盛会のうちに終了することができました。支えていただいたすべての皆様に心より感謝申し上げます。

２，熊本地震を経て

振り返ってみますと、４年前の福岡集会終了後、いつかは熊本でとのお声かけをいただき、熊本在住の各団体と調整を重ね、２年ほど前に開催を受諾いたしました。

そして、準備を始めて間もなくしての、２０１６年4月の熊本地震でした。生きることに必死な時期を経て、皆様からご心配をいただき、３ヶ月後に再度開催について検討をいたしました。まさにその時期でした。神奈川県津久井やまゆり園の事件がありました。この二つの出来事を考える中で、命の危機に直面した私たちだからこそ、被災して改めて共に過ごすことの大切さを実感した熊本だからこそ開催しなければならない使命があるとの気運が芽生え、大変な中ではあっても集会実施を決断しました。そして、昨年８月大阪集会にくまもと集会開催のご案内を差し上げました。しかしながらその後も状況は厳しく、手さぐりの状態が続きました。

それでも、熊本学園大学の先生方のご協力により、会場を使用できることとなり、参加者は少なくても、手作りの心のこもった集会をめざそうと誓いました。実行委員会も８回を重ね、九州の実践を交流し、レポーターを厳選しました。また、２月の全国教研にも参加し、レポーターを募りました。その結果、全国から秀逸のレポート10本が集まり、共に学び共に生きる実践報告ができる確信を持ちました。

すべての業務も、くまもと障害者労働センターの当事者の方々が担当し、集会のポスター、チラシ、集会要項等々のデザインから印刷発注、折り込み、袋詰めまで準備を請け負ってくれました。また、資金作りにも反差別で連帯する各種運動団体が動いてくださって、０からのスタートでしたが、何とか開催できるまでの協賛金が集まりました。

そして、下記の通り、基調報告で述べました「くまもと集会がめざすもの」を目標に掲げて集会当日を迎えました。

くまもと集会基調報告（一部抜粋）

くまもと集会のめざすもの

日本の障害者施策は、「子どもの頃は養護学校、大人になってからは施設に」と云われてきました。この当事者本人の願いではなく、たくさんの親たちの声を基本として推し進められてきました。親亡きあとも安心安全に過ごせるようにとの親たちの思い願いが、受け入れるべき社会の側の差別性の中で、いかに切実であったかに思いをはせる必要があります。しかし、その結果、障害を理由に学校や社会から分けられ、共に学ぶ機会、共に生きる機会を奪われた悲劇が、１年前の神奈川県相模原市津久井やまゆり園の事件でした。特殊教育から特別支援教育へとその呼称をどんなに変えても、原則分離の現在の教育制度は、根本的に差別制度であり、結果的に子どもたちを差別者に育て、優生思想へと走らせる危険をはらんでいます。

そして、熊本では多くの仲間が被災して、命の危険にさらされました。その時改めて確信したのです。生きていくうえで最も大切なライフラインは人のつながりだと。いざという時支え合う人のつながり、地域のコミュニティーが何より心強いのです。それは日頃の暮らしの中で培われていくものです。そして、そのつながりを築く方法は、子どもの頃からお互いの違いを越えて出会い育ち合うことです。

このくまもと集会は、それらの経験を通して気づかされた人のつながりを思い、共に育ち合うことこそ、差別に負けない共に生きる社会へのスタートラインであることを確認し合う集会になればと願っています。

３，大会当日のこと

集会当日は、全盲のシンガーソングライター大山桂司さんのウェルカムソングで始まりました。ピープルファースト熊本田嵜和範代表、長谷川律子全国連代表、現地実行委員長吉村春美の挨拶に続いて、「被災を当して感じたインクルーシブ教育の重要性」と題し、ヒューマンネットワーク熊本植田洋平の被災地からの報告、さらに、くまもと障害者労働センターの仲間たちのよる講演「当事者からの主張」が行われました。

分科会は、①「生まれてから就学まで」②「地域の子どもといっしょに学ぶ」③「地域の学びを高校へ」④「地域で生きる」⑤「熊本地震と津久井やまゆり園事件を考える」の５つの分科会を開催しました。どの分科会も熱い論議が交わされました。各分科会の論議については、それぞれ報告を掲載させていただいています。ぜひご一読ください。

閉会行事では、分科会報告の後、放課後等デイサービスにじいろの子どもたちが主役を務め、集会アピールを宣言、その後採択され最後に、永六輔さんを偲んで「見上げてごらん夜の星を」を合唱し集会行事を閉会しました。

くまもと集会のご案内でご紹介しましたように、この集会は、９年前の妹を思う幼いお姉ちゃんの言葉、「ママ、どうしていっしょの学校に行けないの？」から始まりました。この純粋な幼いお姉ちゃんの声は、大人たちを差別の現実に気づかせ、くまもと集会を開催するきっかけとなりました。そして、この子どものまっすぐな問いかけに応えようとする反差別の仲間たちが結集して、本集会を作り上げることができたと感謝しています。

集会終了後、被災地視察を実施しましたところ、40名のご参加をいただきました。車窓からの被災地の現状視察をへて、被災地障害者支援センターで東俊裕事務局長のお話を聞きました。被災当初の活動の様子と共に、これからの活動計画も語られました。長く厳しい取り組みを支えるためには、ボランティアの人と資金が必要であること。今後の全国からの支援をお願いしたいと結ばれました。その後、益城町テクノパーク仮設団地で今も過ごす橋村ももかさんの自宅訪問と、全壊した自宅からの救出と共に過ごすことの意味を論議する機会を得ました。もうこれ以上同じ過ちを繰り返すことがないように、この教訓を生かさなければならないとの訴えがありました。

４，おわりに

集会を開催したことにより、何よりもうれしい出会いがありました。この集会開催の記事が報道され、実行委員会事務局に、数件の就学相談があったのです。当日も急遽就学相談の窓口を設置しましたところ、４件のご相談がありました。「お姉ちゃんといっしょに地域の学校に入学させたい」「通常学級に在籍してみんなといっしょに過ごしたい」「高校に入学したい」「自立生活をして、大学生活をしたい」等、どれも子どもたちの共に過ごしたい権利についてでした。集会開催を目標にがんばってまいりましたが、それ以上に、こうした出会いの場になったことはそれ以上の意味を持つことになったと喜んでいます。

このくまもと集会を新たなスタートして、このネットワークをさらに広げ、一人でも多くの子どもたちの共に学びたいという願いを実現してまいります。

最後に、本当に熊本でできるのだろうかという私たちの心配をよそに、全国からたくさんのご参加をいただき、「共に学び共に生きる」実践の交流ができましたことに心から感謝し、くまもと実行委員会からのお礼の言葉とさせていただきます。本当にありがとうございました。来年、愛知でお会いしましょう。

開会式

第４分科会

オプショナルツアー・被災地視察
益城町小谷テクノ仮設住宅